



世界花の下物類
 全

^ 13
 3135



自序

武藏野の廣きおん東と露草の玉
光る月の宵の清酒紙吸で
朝の銀世界の小鴉の美を口は味ひ
おとろけ帝代豊か花の春乃
鳥追ひの唱歌の七福や
おとろけ帝代豊か花の春乃
鳥追ひの唱歌の七福や

棹の櫻木に寫し青柳の糸
ひや霞乃色表紙と長物紙と酒
のそと人まゝ古き酒屋の
おとろけ帝代豊か花の春乃
おとろけ帝代豊か花の春乃
おとろけ帝代豊か花の春乃
おとろけ帝代豊か花の春乃



卷中品目

發端福徳や吉盃

日本橋富士眺望

細吉あやまちて犬の屎を踏

明神糸漬酒肴よむる

大福縁笑言飛木の滑稽

王子社拜海の川げうん

道灌山ツのよけの活

細吉百姓へんてと争論

池の端滑る金武山の活

惠方系りの浮足

女中評判高年れのみ話

水菜屋下りけ路筋

細吉朋友情とらる

多ひや小酒肴とてや

たん不道笑話

徳ちう茶店よききき

日暮の残がや大夏

奥山のちや細吉開口

書目早

世界
諸夏

花の下物語

東都

十返舎一九関

長二樓乳足著

春眠不覚曉邯鄲のむろと枕よ結ぶ一睡爰未と

夕よ掛乞と追拂ふ支げめの帯かぐの横は旅て

休むえ日の朝古年の墓を流を井戸のんこ流

若水とらる門の松竹色とる氏年法神の極

青陽を振る。雅煮焼鍋づるふ千貫を

ろろがめふ万年の穀をむよぶ大福町の裏通りふ
 福徳屋徳方と名れらるる能ふ人しつも妻の
 先へ長閑るる鶯の欠たる比ふくとも月をこころて
 起出る門口は扇くお宝の声の目生をや
 綱吉ハイロ菱中入并綱吉お宝のく綱吉さん
 とうがおとふんよおれをさうゆきうおとめを相
 かわるるの重徳のうぶくめをさくひらけ
 おぐりませぬら綱吉へそまお何うあつがさう

は中よりやすとイヤ法者あつまんしはもくおたの
 一やではらいやはふらちあまのまお母へうもむ
 一自いんとゆいすせぬんはあしこちん
 おあがりあさおあつあつとめおつとめおつとめ
 内々のおあがおておつとめおつとめおつとめ
 袖吉ハヤとよめおつとめおつとめおつとめ
 長尾のはあつとめおつとめおつとめおつとめ
 きせつて妻の日のふがくあつあつとめおつとめ
 おつとめおつとめおつとめおつとめおつとめ
 た袖吉あんとおつとめおつとめおつとめおつとめ

中におはるよーてんまのさあぶちを

あしはめてあぶち^{細言}のいんまの細言を

ことうがりのほめぬかぐのさあぶちを

まはてへいやあぶちをいんまのいんま

ま^{細言}あさうかちとせおのほくよまま

かふん^{細言}のいんまのいんまのいんま

ア^{細言}くさお^{細言}のいんまのいんま

益^{細言}のいんまのいんまのいんま

さんよのいんまのいんまのいんま

は^{細言}るはあ^{細言}のいんまのいんま

あ^{細言}くお^{細言}のいんまのいんま

ま^{細言}あ^{細言}のいんまのいんま

あ^{細言}のいんまのいんまのいんま

あ^{細言}のいんまのいんまのいんま

あ^{細言}のいんまのいんまのいんま

細言
 におにんはあはれにうらやまをいふにや
 およびせしつらふに傳をうつまをさしげれ
 やーたざおちヤリおちの志すにたりたむこも何も
 じりきよを細言そのたむこもあはれにいふ
 おしせらふのむおちなむ細言あはれに
 かののおちイヤおち金おちひりひりいふ
 ひらあはれあはれとあはれをさし細言ア
 おにんをいふはあはれにいふの傳はたり細言ア

おにんはあはれにうらやまをいふにや
 各あはれにいふはあはれにいふはあはれに
 うちうらやまをいふはあはれにいふはあはれに
 してあはれにいふはあはれにいふはあはれに
 さいの酒おちにさしつらふに傳をうつまをさしげれ
 ヤおちちとおち遠おちあたり市おち町の西おち口おちを
 がかんとよふにいふはあはれにいふはあはれに
 におちえりちとおち愛おちつてやうくあはれにいふはあはれに

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on aged, yellowed paper and is enclosed within a rectangular border. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines across the page.

